

## 今週の為替相場見通し(2023年9月11日)

| 総括表      |      | 先週の値動き |                 |        | 今週の予想レンジ        |
|----------|------|--------|-----------------|--------|-----------------|
|          |      | 注      | レンジ             | 終値     |                 |
| 米ドル      | (円)  |        | 146.04 ~ 147.87 | 147.84 | 145.50 ~ 149.00 |
| ユーロ      | (ドル) |        | 1.0686 ~ 1.0809 | 1.0700 | 1.0600 ~ 1.0850 |
| (1ユーロ=)  | (円)  |        | 157.03 ~ 158.51 | 158.18 | 156.00 ~ 159.00 |
| 英ポンド     | (ドル) |        | 1.2445 ~ 1.2642 | 1.2466 | 1.2200 ~ 1.2600 |
| (1英ポンド=) | (円)  | *      | 183.07 ~ 185.78 | 184.28 | 182.00 ~ 187.00 |
| 豪ドル      | (ドル) |        | 0.6358 ~ 0.6480 | 0.6379 | 0.6320 ~ 0.6470 |
| (1豪ドル=)  | (円)  | *      | 93.59 ~ 94.72   | 94.27  | 93.50 ~ 95.20   |

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

(1)今週の予想レンジ: 145.50 ~ 149.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

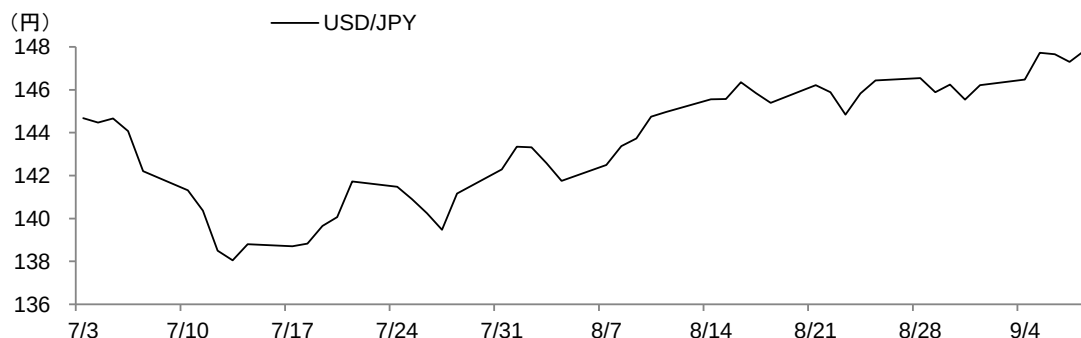
先週のドル/円相場は、続伸して年初来高値を更新する展開。週初4日、146.08円でオープンしたドル/円は、材料に欠ける中、レンジ推移した。海外時間は、米国休日で動意に欠ける中、ユーロ/円相場の動向につれる格好で146円台半ばに上昇した。5日、ドル/円は米金利上昇を受け147円付近に続伸。海外時間は、ウォーラーFRB理事の発言が警戒されたほどタカ派でなかったことを背景に弱含む場面もあったが、米金利が高止まりする中、147円台後半に上値を伸ばした。6日、ドル/円は神田財務官の円安けん制発言や、米金利低下を受け147円台前半に下落。海外時間は、米8月ISM非製造業景気指数の堅調な結果を背景にした米金利上昇につれ147円台後半に値を戻した。7日、ドル/円は仲値にかけ円売りが強まり、年初来高値となる147.87円に続伸も、その後は日本株の軟調推移や米金利低下を受け147円台半ばに反落。海外時間は、米新規失業保険申請件数や米4~6月期単位人件費(確報)の強い結果を背景に147円台後半に上昇する場面もあったが、米金利が低下基調を続けたこともあり147円台前半に下落した。8日、朝方に米商務省による中国製華為技術の半導体について調査との報道を受けたリスクオフや、鈴木財務相の「(為替相場の)過度な変動にはあらゆる選択肢を排除せず対応」との円安けん制発言を受けドル/円は、146.60円まで急落する場面がみられたが、すぐに147円台まで買い戻されると海外時間には米金利が上昇に転じる動きにドル/円も147円台後半まで上昇。前日に更新した初来高値147.87円をつけ、高値圏のまま147.84円での越週となった。

今週のドル/円は当局の円安けん制に対する警戒感の中でも底堅い動き想定。毎週のように年初来高値を更新する円安進行に対し再び当局の介入警戒感が強まっており、先週も神経質な動きをみせた。また先週末は、一部新聞インタビューでの植田日銀総裁の「持続的物価上昇に確信が持てれば、マイナス金利解除含めあらゆる選択肢がある」「年末までに十分な情報やデータが揃う可能性はゼロではない」との発言に本日朝方、146円台後半まで急落する場面が見られた。ただ、日米金融政策転換には依然時間的距離があり金利差縮小余地は限定的、単発的なヘッドライン反応を示しつつも円安方向への地合いは変わらずと考える。今週は13日(水)米8月CPI、14日(木)米8月小売売上高、米8月PPI、15日(金)米9月ミシガン大消費者マインド(速報値)の発表等、重要指標が相次ぐ。Fedが今週ブラックアウト期間入りとなり要人発言の予定はないものの、米国の堅調な経済指標を背景にソフトランディング期待が一段と強まれば、ドル買いが勢いづく可能性があろう。また、14日にはECB政策理事会も予定しており、ユーロ圏の景気減速懸念から追加利上げ期待が後退し、据え置きとなれば足元軟調なユーロが対ドルで下げ幅を広げ、ドルインデックスの上昇にサポートされながら、ドル/円は再び上値を試す展開をみておきたい。

## (3)先週末までの相場の推移

先週(9/4~9/8)の値動き:

安値 146.04 円 高値 147.87 円 終値 147.84 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 小林 元子

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.0850 156.00 ~ 159.00 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、米金利上昇を受け、6月8日以来、3か月ぶりに1.07ちょうどを割り込んだ。週初4日、1.0776でオープンしたユーロ/ドルは、独金利上昇を受け一時1.08台に乗せるも、引けにかけては失速し1.08台を割り込んだ。5日、ユーロ/ドルは米金利上昇が重しとなる中、ユーロ圏8月サービス業PMI(確報)の弱い結果が嫌気され、1.07台前半に下落した。6日、ユーロ/ドルは独金利上昇が下支えとなり1.07台半ばに上昇も、NY時間には良好な米経済指標を受けた米金利上昇を背景に1.07付近に反落した。引けにかけては、ユーロの戻り買いもあり一日を通してはほぼ往って来いとなった。7日、ユーロ/ドルはユーロ圏4~6月期GDP(確報)の下方修正が嫌気されたことや、堅調な米経済指標を受けた米金利上昇が重しとなり、一時週安値となる1.0686に下落した。週末8日、1.06台後半でスタートし、1.0710付近を挟んだ値動きが続いた。海外時間では、独8月CPI(確報値)が発表され、予想通りの結果となるものの、ユーロ/ドルは反応薄。その後、米金利低下を受け、1.0744まで戻すも、その後は伸び悩み反落し、結局1.0700で越週した。

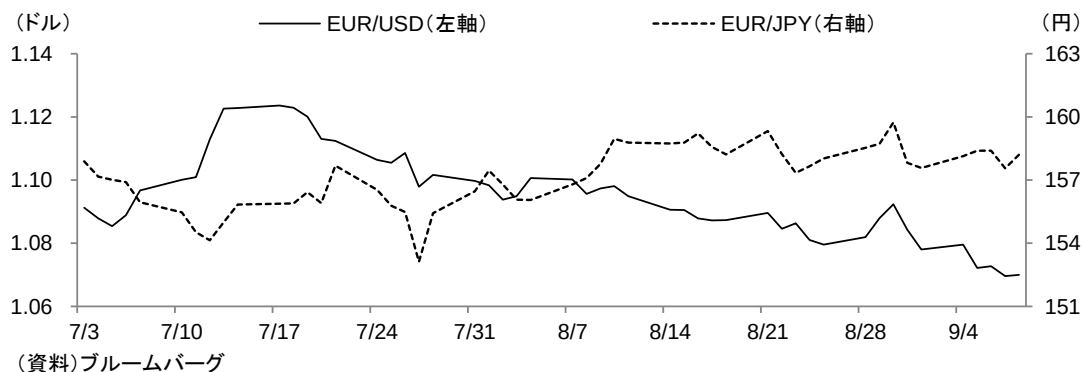
今週のユーロ相場は弱含む展開を予想する。先週は発表されたユーロ圏8月PMIの軟調な結果や、7月ECB政策理事会議事要旨において、9月の利上げについては見送りの見解が含まれていたことを受けて、ユーロ/ドルは週初1.08台から一時1.07割れの展開となった。今週は14日(木)にECB政策理事会が控えており、ユーロ圏におけるインフレの高止まりがくすぐる一方で、域内経済の減速が一段と強まっており、利上げの送りが決定された場合は、対ドルで一段のユーロ売りの展開となる可能性が大きくあり、留意したい。今週の重要指標の発表は12日(火)独9月ZEW景気期待指数、13日(水)ユーロ圏7月鉱工業生産、14日(木)ユーロ圏ECB政策理事会、15日(金)ユーロ圏7月貿易収支、ユーロ圏4~6月期労働コストなどの発表が予定されている。

## (3) 先週までの相場の推移

先週(9/4~9/8)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0686 高値 1.0809 終値 1.0700

(対円) 安値 157.03 高値 158.51 終値 158.18



## 3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2200 ~ 1.2600 182.00 ~ 187.00 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は対ドルで続落。対円、対ユーロでは横ばいとなった。原油価格の上昇、及び米国の強い経済指標を背景にグローバルに一段とドル高が進んでいる。それに加え、イングランド銀行(BOE)の追加利上げ期待の後退も、ポンドの重石となった。原油価格は騰勢を強めている。ブレント先物は昨年11月以来初めて1バレル=90ドルを上回った。9月6日には、サウジアラビアが日量100万バレルの自主減産を12月まで継続するほか、ロシアも同期間、原油輸出の削減を継続すると報じられている。原油価格とドルは7月以降、共振して上昇する傾向が顕著となっている。米国が世界最大規模の原油生産国・輸出国となっていること、それに対してユーロ圏や中国、日本といった米国以外の主要国・地域は原油を輸入していること、が背景にある。また、米国では9月6日に公表された8月分のISMサービス業が6か月ぶりの高水準となり、米2年債利回りは5%を超えた。7日公表の新規失業保険受給者数が市場予想を下回ったことも、米金利上昇・ドル高の流れを後押しするものとなった。一方の英国では、9月6日にベイリーBOE総裁が議会財務委員会の公聴会において、政策金利をさらに引き上げる必要はなくなった可能性があるとの認識を示した。インフレは年内に「著しく」低下する公算が大きく、金融政策は恐らく「サイクルの頂点付近」にあるとしている。また、ベイリーBOE総裁と共に公聴会に出席したカンリフ副総裁は、銀行が信用条件を引き締め、金利上昇に伴い企業の債務も増えつつあると指摘している。7日に公表された8月分のDMPインフレ調査では、1年のインフレ率予想が7月の年率+5.4%から同+4.8%に低下している。市場が織り込むBOEのターミナルレート(政策金利の到達点)は9月1日の5.67%から、9月8日の時点で5.55%まで低下した。現在の政策金利の水準である5.25%から残り+25bpの追加利上げで金融引き締め局面は終了するという見方が支配的となりつつある。

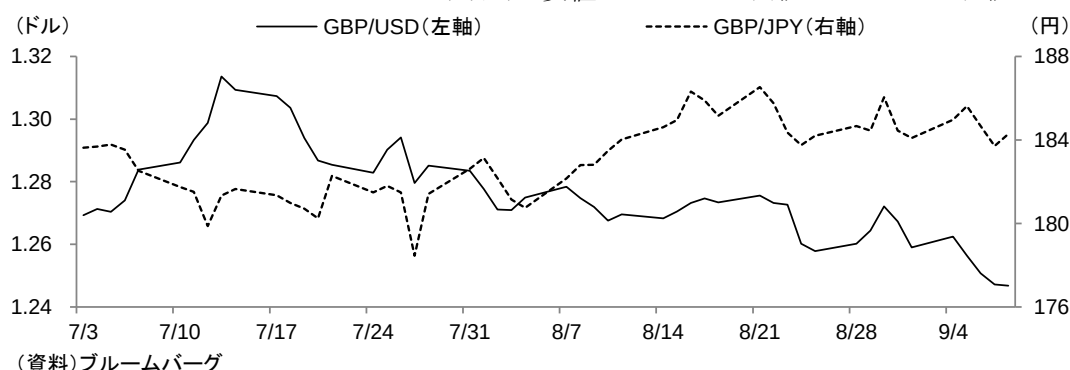
今週1週間のポンド相場は米欧英の主要経済指標・イベントを多く控え、データ次第の色彩が強いと考えられるが、総じて引き続き上値の重い展開を想定している。最大の焦点は9月13日(水)に控える8月分の米CPIである。エネルギー価格の上昇もあり少なくともヘッドラインの数値(特に前月比)は再び加速する可能性が高い。9月14日(木)の欧州中央銀行(ECB)の金融政策も注目だ。市場では金利据え置きがコンセンサスとなりつつあるが、みずほのエコノミストは追加利上げを見込んでいる。先週、FRBのウォラー理事が9月会合での据え置きを支持する姿勢を示したこともあり、ECBの追加利上げとなれば、ややドル高の勢いが和らぐ可能性があるだろう。英国では12日(火)に労働市場関連統計が公表される。賃金上昇圧力は、景気減速懸念が強まるなかでもBOEがタカ派姿勢を崩さない要因となってきただけに、労働市場関連統計の軟化はBOEの追加利上げ期待を一段と後退させるきっかけとなりうる。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(9/4~9/8)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2445 高値 1.2642 終値 1.2466

(対円) 安値 183.07 高値 185.78 終値 184.28



## 4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.6320 ~ 0.6470 93.50 ~ 95.20 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.64台半ばから、0.63台後半まで下落。週初4日、豪4～6月期企業在庫が減少したことなどから一時下落する局面もあったが、堅調な株価や豪国債利回りの上昇などを背景に、終日0.64台半ば近辺でこじつかりと推移。5日、RBAは政策金利を4.1%に据え置くことを決定。インフレ率のピークは過ぎたものの、サービス物価や家賃の伸びがまだ高水準であることを指摘。更なる金融政策の引き締めが必要になる可能性がある、従前の記述を繰り返した。3か月連続の据え置きとなったことで、市場では利上げ終了観測が広がり、豪ドルは売りで反応。一旦0.6420近辺まで下落した後、ロンドンオープンにかけて更に売り進まれ一時0.6358を付けた。米7月製造業受注が予想比良好な結果だったことを受けて米金利が上昇したことも豪ドルの頭を押さえた。6日、前日の米金利上昇の流れを引き継いでドルが買い進まれる中で売りが先行して一旦0.6359まで下落。豪4～6月期GDPは前年比で市場予想を上回り(2.1%、予想1.8%)、豪州経済の底堅さを示す結果となり、豪ドルの下値を支えた。米8月ISM非製造業景況指数が予想外に強い結果となったことでドルは大きく買い進まれたが、豪ドルは底堅い値動きを見せて0.6380近辺で引けた。7日、中国が情報規制強化を拡大するとのヘッドラインを受けて人民元が下落幅を拡大する中、連れ安の展開に。ロンドンオープン頃から豪ドルに買いフローが入り一旦0.6395近辺まで上昇するも、その後はNY市場時間にかけてレンジ推移となった。尚、昨日発表された豪7月貿易収支は予想を下振れたが、市場への影響は限定的であった。8日、中国人民銀行が中心レートを元安方向に設定したことを受けて元安が大きく進行すると、一時売りが優勢となり0.6367近辺まで下落。午後に入り、米石油関連企業と調停協議をしていた豪労働組合が、豪LNG施設2か所ストライキの開始を宣言。この報道を受けて欧州LNG価格が10%以上上昇する中、豪ドルは買いで反応して一時0.6415近辺まで上昇した。その後はドル買いに押されて反落し、一日かけて往って来いの値動きとなり、0.6380近辺で越週。

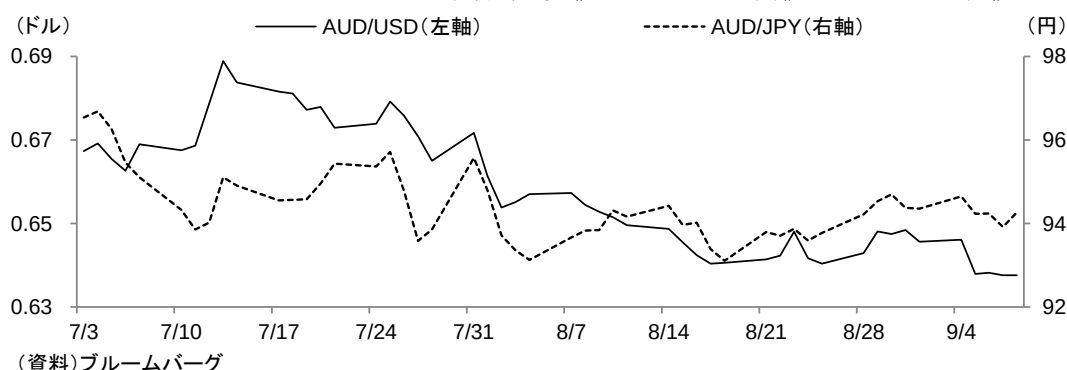
今週の豪ドルは上値の重い値動きを予想する。今週は13日(水)米8月CPI、14日(木)豪8月雇用統計、ECB政策理事会、15日(金)中国8月主要経済指標が予定されており、米CPIと豪雇用統計がハイライトとなる。前月発表された7月豪雇用統計では予想に反して弱含む結果となり、RBAの利上げ終了観測が広がった。今月は再び雇用者数の増加が見込まれており、どこまで揺り戻されるのか注目される。足許の金先市場では年内1回の利上げを25%程度織り込んでいるが、織り込みが修正されるような結果となれば、豪ドルの方向性に影響を与えよう。又、15日(金)に発表される中国8月主要経済指標も、中国景気減速の底入れが確認できるか否かに注目が集まる。

## (3) 先週までの相場の推移

先週(9/4～9/8)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6358 高値 0.6480 終値 0.6379

(対円) 安値 93.59 高値 94.72 終値 94.27



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。